

# 第1回 安曇節作詞募集作品集

発行

安曇節作詞実行委員会

令和3年10月9日

第1回 安曇節作詞募集 優秀10選句 作者

- |                               |              |
|-------------------------------|--------------|
| 常念坊の 雪形みては 安曇の人は 野良仕事         | 大石和子         |
| 光城山 登りて望む 安曇平と 槍ヶ岳            | 坂井武昭         |
| 胸を張りたし われらが里にや 安曇節あり 安曇節あり 宝唄 | 齊藤郷子         |
| 五月安曇野 稲田に写る 逆さ常念 美しき          | 中田光男         |
| パリであいましてよ 五輪のもとで コロナ退治も 終わる頃  | 平林美恵子        |
| 光城山 桜が登る 峯をめざせば 龍となる          | 上條 強         |
| わさび好みの 湧水に似て 安曇娘は 気立て良し       | 荻原 保子        |
| 孫の笑顔を スマホで見れば 今日もいけるか 農作業     | 安井 邦夫        |
| 安曇平に 稲穂がゆるる 大盛そばに わさびそえ       | 岡里 眞砂子       |
| 酔ってほど良い 旅路の酒は 安曇節だと 唄がでる      | (有明里玄山) 吉澤玄秀 |

2021（令和3）年9月1日～23日応募作詞

は10選作品

NO.	作詞作品	応募者名	ペンネーム
1	常念岳の 雪とけ始め わさびの花は 咲き揃う	大石和子	
2	湧き水清き わさび田の 小砂利の中に わさび咲く	大石和子	
3	五月の声を 聞けば水田(みずた)に 早苗植えれば かえる鳴く	大石和子	
4	水田(みずた)に映る 雪のアルプス 小波(さざなみ)にゆれ 田植待つ	大石和子	
5	常念坊の 雪形みては 安曇の人は 野良仕事	大石和子	
6	安曇良いとこ みんなおいでよ 老いも若きも 集まれよ	大石和子	
7	常念岳は 朝日にあたり 茜(あかね)に染まる 冬の朝	大石昭明	
8	有明山を 毎日ながめ 朝の散歩は 壮快だ	大石昭明	
9	有明山は 安曇野を見て 守りてくれし 凄い山	大石昭明	
10	わさびの花は 見ても食べても 心晴れやか 目が覚める	大石崇秀	
11	空の鳥の音(ね) 楽しく歌う 5月の田んぼ 水満ちる	大石崇秀	
12	風さわやかに 満天の星 かえるの歌が 田に響く	大石崇秀	
13	病を防ぎ 家内安全 道で見守る 道祖神	大石崇秀	
14	高瀬と梓 犀に ゆられて 海まで行こう 安曇節	大石崇秀	
15	踊ろうみんな ひびけとどけよ ひびけとどけよ 安曇節	大石崇秀	
16	泉小太郎 岩盤砕き 水の中から 安曇野市	大石崇秀	
17	明科穂高 豊科三郷 堀金みんな 安曇野市	大石崇秀	
18	光城山 登りて望む あれが常念 槍ヶ岳	坂井武昭	
19	光城山 登りて望む 安曇平と 槍ヶ岳	坂井武昭	
20	桜並木を 登りて望む 銀雪かがやく 西の山	坂井武昭	
21	稲穂がゆれる 秋のはじめに 夏を惜しむか 蝉の声	坂井武昭	
22	遠く離れて 思いだすのは 懐かしき唄 安曇節	坂井武昭	
23	西のアルプス 東の高瀬 間(あい)を走る 大糸線	坂井武昭	
24	さあさ唄えや 踊れや踊れ 老いも若きも 安曇節	坂井武昭	
25	安曇平に 一度はおいで 岳の峰々 おもてなし	坂井武昭	
26	常念岳の 常念坊は 酒を求めて 里へ来る		信濃鶴姫
27	有明山で 安曇平を 今も見守る 大王は		信濃鶴姫
28	日本のロダン 語り継ぐのは 礪山館よ いつまでも		信濃鶴姫
29	長峰山の 上から見れば 安曇平が 一望だ		信濃鶴姫
30	残雪 閃く 北アルプスを背に ユルリ~と行くヨ 大糸線	二茅人美	
31	高家(たきべ). 八原(やばら)と 前科(さきしな). 仁科(にしな 村上)・古代里よと	横澤脩夫	
32	胸を張りたし われらが里にゃ 安曇節あり 安曇節あり 宝唄	齊藤郷子	
33	朝な夕なに 有明富士を 仰ぐ里人 仰ぐ里人 幸あれと	齊藤郷子	
34	眺む西空 蝶から白馬 雪の峰々 雪の峰々 碧に映え	齊藤郷子	
35	早苗 田に吹く 五月の風に 流る音歌 流る音歌 音楽祭(まつり)から	齊藤郷子	

NO.	作詞作品	応募者名	ペンネーム
36	和歌に 聞こえた 西行法師 ころろ細野と ころろ細野と 詞(うた)いしか	齊藤郷子	
37	北アルプスに 守られ嬉し 天災少なき 安曇野よ	保尊重子	
38	雪どけ水が 田畑うるおし 早苗青々 鏡なる田(た)		ヒラリン
39	雑木林で 虫とりはげむ 声高々と 子らの笑み		ヒラリン
40	夕ぐれちかく とびかうトンボ 大きな月が ついてくる		ヒラリン
41	しんしんつもる 雪深き田で 空に向って 両手広げん		ヒラリン
42	昔とよしな 今安曇野市 今も昔も 信号キ	神戸千寛	
43	祖母の生家の 近くに今も ピンが立ちます 目印です	神戸千寛	
44	アルプスに降る 雨地下に浸み ワサビ育てと 湧いて出る	矢口鐵郎	
45	雪降る頃 白鳥親子 あづみ野の空 群れ遊ぶ	矢口鐵郎	
46	美味しい米有り 果物野菜 あづみ野に住む 倅せよ	矢口鐵郎	
47	早苗輝く 安曇の田んぼ 西のお山に 雪の蝶	宮下淳	
48	早苗の緑 水面に映えて 西のお山に 雪の蝶	宮下淳	
49	稲の穂先が 頭をたれる 恵み豊かな わが里よ	宮下ちづ子	
50	ワサビの花が 白く咲く頃 雪どけ水が 春告げる	宮下ちづ子	
51	豊かな流れ 大地を育て 希望の郷よ 安曇野は	宮下ちづ子	
52	雪に輝く 北アルプスに 今日希望の 陽が注ぐ	宮下ちづ子	
53	今も変わらぬ 柳の郷は 東京銀座と 兄弟せ		ヒゲー
54	今も変わらぬ 安曇野人は 情けと人情 お節介		ヒゲー
55	辛いワサビに 目が覚めりゃ 人情さわやか 安曇人		ヒゲー
56	春が来たぞと 常念岳に 常念坊と 蝶が飛ぶ		ヒゲー
57	秋が来るぞと こうべを垂れる 稲穂も招く 秋祭り		ヒゲー
58	二人手を取り 道祖神 明日を夢見て 酒かわす		ヒゲー
59	今はコロナで 大騒ぎ やがて晴れるよ 安曇野は		ヒゲー
60	光城山 桜も登る 槍も迎えて 皆を待つ		ヒゲー
61	蒸気機関車 たなびく煙 踊り続ける 女衆	永田浩幸	
62	カセットでなく CDでもなく 生で聞きたい 安曇節	永田浩幸	
63	江戸時代から 続く歴史の 新橋鮎の たぐり鮎	永田浩幸	
64	ひばりの瞳 ただ魅せられて 恋の予感の 秋の酒	永田浩幸	
65	コロナのせいか 人影まばら 蕎麦屋なくなる 大糸線	永田浩幸	
66	瀬戸内海 海にも駅や 信号がある 島々に	永田浩幸	
67	老いも若きも 夜通し踊る あずみ踊りの 輪となって	小林 仁	
68	池田八幡 祭りの夜に 祇園囃子の 笛響く	小林 仁	
69	花見(けみ)の水路や 田圃の畦に 初夏の夕暮 舞うホテル (池田町花見地区)	小林 仁	
70	涼し音色で 鳴くすずむしに 今日の疲れも 癒される (松川村 西原地区)	小林 仁	

NO.	作詞作品	応募者名	ペンネーム
71	提灯 片手に 小道をゆけば 鈴虫の音色(こえ) 澄み渡る (松川村すずむしの里)	小林 仁	
72	お船祭の 賑わう 境内(なか)で 若い 二人が 誓う愛 (穂高神社お舟まつり)	小林 仁	
73	秋の祭りの 八幡様に 山車(ぶたい)見にきた 人の波 (池田八幡神社例大祭)	小林 仁	
74	八幡神社(はちまんさま)に 山車(ぶたい)揃えば 祇園囃子の 笛響く (池田八幡)	小林 仁	
75	安曇だいらに 秋こがねいろ いなほのなみに 秋ふかし	榛葉 晃	
76	雪どけまじか 小川のおとに せせらぎしのび 春のおと	榛葉 晃	
77	まつたけかおる 秋のよながお あさばんひえて うまみます	榛葉 晃	
78	くもにたなびく 有明山に げかいみおろし なに思う	榛葉 晃	
79	コロナコロナと 騒いでいても 誰も知らない そのゆくえ	今井清隆	
80	コロナこわいよ 人目にふれず いつの間にやら 染めつくす	今井清隆	
81	異常気象が たびかさなって どの家でも エアコンまつり	今井清隆	
82	パリであいましょ 五輪のもとで コロナ退治も 終わる頃	平林美恵子	
83	異常気象も たびかさなれば 雪のまつりが なつかしい	平林美恵子	
84	憧れ募る 常念岳の 神々しさよ いつまでも	務台俊介	
85	毎朝拜む 常念岳は 小学校の 校歌にも	務台俊介	
86	北アルプスの 裾野を飾る 国営公園 憩いの場	務台俊介	
87	夏の夜には 安曇野唄に つられて踊る 若連は	丸山多鶴子	
88	常念坊の 雪形残り あづみ平に 春告げる	丸山多鶴子	
89	かすみたなびく あづみの里に わさびの花の 美しさ	丸山多鶴子	
90	安曇良いとこ 一度はおいで みんな揃って 踊りゃんせ	小宮山チヅ子	
91	安曇良いとこ 一度はおいで 老いも若きも 踊りゃんせ	小宮山チヅ子	
92	穂高豊科 一度はおいで みんな揃って 踊りゃんせ	小宮山チヅ子	
93	みんなおいでよ 安曇の里に 老いも若きも 安曇節	大石和子	
94	安曇平の あまたの辻に 仲睦まじき 道祖伸	保尊 重子	
95	豊かな自然に 慎ましく生く 水と空気の 旨き里	保尊 重子	
96	今は秘めしが 安曇平に 歌い継がれし わらべ唄	保尊 重子	
97	松糸道路 ドライブすてき 早く来い来い あづみのに	細野 修市	
98	朝やけすてき 北アルプスに 幸せもとめ やって来る	細野 修市	
99	梓・高瀬に 穂高川へと みんな仲よく 犀川へ	細野 修市	
100	有明山で 太鼓叩いて 安曇野踊り 人を呼ぶ	矢ノ口二千六	
101	常念岳で 安曇野見れば 稲穂と山葵 人が来る	矢ノ口二千六	
102	花を見るなら 国営公園 春は菜の花 チューリップ	上條 強	
103	光城山 桜が登る 峯をめざせば 龍となる	上條 強	
104	夏の須佐渡は 憩いの場所だ 流れ早いぞ 烏川(カラスガワ)	上條 強	
105	田畑うるおす 拾ヶ堰はね 文化遺産に なりました	上條 強	

NO.	作詞作品	応募者名	ペンネーム
106	冬の安曇野 出湯の町よ 長寿の里と 延命水	上條 強	
107	山で名高い 常念岳は 坊さん片手 酒買いに	上條 強	
108	犀川ダムに 白鳥飛来 姿やさしく いやされる	上條 強	
109	八面大王 金太郎山の 大姥さんと 恋をした	上條 強	
110	北アルプス どの山見ても 朝日あたりて 見事なり	高田 尚武	
111	よくぞ来たねえ 安曇の里へ 村の宝の 安曇節	高田 尚武	
112	月が出た出 北アの上に 安曇だいらを 照らせける	高田 尚武	
113	コロナ コロナで 毎日くれる いつになったら 終わるやら	高田 尚武	
114	槍は大刀(たち)持ち 居(おわ)すは常念 有明山は 露払い	荻原 保子	
115	伸ばすこの手に 届かぬ岳(やま)も 吾田(あがた)の水に 御居(おわ)します	荻原 保子	
116	わさび好みの 湧水に似て 安曇娘は 気立てよし	荻原 保子	
117	万水川は わさびに水車 今柄流行(いまがらはや)る ラフティング	荻原 保子	
118	コロナ禍疲れ 心いやすは 清き湧水 道祖神	荻原 保子	
119	穂高のやしろ 御船祭りは いにしへの糸 海の父祖(ふそ)	荻原 保子	
120	田毎田毎の 水面に映える 常念岳の 美しさ	松島 賢	
121	流れ悠々 時代(ときよ)を超えて 緑を今に 拾ヶ堰	松島 賢	
122	春が来たかと 常念岳に 雪形見えて 畑を打つ	松島 賢	
123	夏が来たかと 須砂渡の流れ 釣り糸垂れて 待ちに待つ	松島 賢	
124	秋が来たかと 稲穂の波で 安曇野覆う 黄金色	松島 賢	
125	冬がきたかと 犀川ダム湖 白鳥群れて 鳴き交わす	松島 賢	
126	常念岳に 坊主きて 安曇平は 水鏡		西の東山
127	コロナ怖いが 踊らにゃならぬ 豊穡祈って 安曇節	安井 邦夫	
128	孫の笑顔を スマホで見れば 今日もいけるか 農作業	安井 邦夫	
129	田植え始まり 蛙も踊る 常念坊は 手酌酒	安井 邦夫	
130	拾ヶ新田 矢原に勘左 田畑潤す 堰の網		さかさん
131	地味に控えし 初夏蝶ヶ岳 可憐に飾る 白い蝶		さかさん
132	連なり並ぶ 北アルプスを 眺め見守る 長の峰		さかさん
133	春の晴れ間に 田鏡みれば 豊作祈る 常念坊		おらほ
134	生きる権利を 世界に広げ 未来につなぐ 加助さま		おらほ
135	緑と風が やさしくつつむ ここは安曇野 道祖伸		おらほ
136	北のアルプス 育む水が あづみの里に 踊り湧く	猿田 ちとせ	
137	水の自慢の 鳥と穂高 王者いわなの 悠々と	猿田 ちとせ	
138	獅子座・安曇野 吉見の作よ 会にきましょや 文学館	山口 良夫	
139	女・文覚 礪山つくる ロダンたまげる その才に	山口 良夫	
140	吉見迎えた 敗戦記念 不戦のちかい いまあらた	山口 良夫	

NO.	作詞作品	応募者名	ペンネーム
141	れんげ・白壁 水田にはえる 五月きましよや 文学館	山口 良夫	
142	よれやよてこい 明科・三郷 穂高・堀金 豊科よ	山口 良夫	
143	みんな集まれ 文学館に 6月なつかし れんげ忌や	山口 良夫	
144	先人つくった ひよくの平 安曇うるおす 十ヶ堰	山口 良夫	
145	光城山 登ってみれば 日本アルプス 桜浪	山口 良夫	
146	井口喜源治 先人つくる 礪山・里光 尚江あり	山口 良夫	
147	忘れてなるか 穂高の空襲 平和の空よ いつまでも	山口 良夫	
148	北に松川 東に池田 南に広がる 安曇野市	山口 良夫	
149	夕空安曇野 流れる風に 有明・常念 青い影	山口 良夫	
150	日本アルプス 前山みれば 餓鬼に、つばくろ 鍋冠	山口 良夫	
151	信州サーモン ニジマスジムで 鍛えて美味しい つぶらあげ		...1[アマリイチ]
152	八面大王 ペタンク負けて 耳は耳塚 足は湯に		...1[アマリイチ]
153	青く輝く オオルリシジミは グルメな蝶々 クララだけ		...1[アマリイチ]
154	1234 56歌えば 足並み揃う サア踊ろ		...1[アマリイチ]
155	安曇平に 稲穂がゆるる 大盛そばに わさびそえ	岡里 真砂子	
156	わさびの里は 水は清らか 人も清らか 住むによし		K.O.D
157	今日も 晴々(はればれ) アルプスの峰 空の青さが 目にしみる		ひいー ちゃん
158	寒さ厳しい 安曇の里 人のところは あたたかし	召田 美恵子	
159	雪の常念 眺めて走る サイクリングの さわやかさ		田園の光
160	湧き出す汗に 出で湯を浴びて 十ヶ堰沿い 清々し		田園の光
161	人恋しくて 錦織りなす 穂高の杜は 抱き込まれ		田園の光
162	星はまたたき 光はさえて 支えあう町 安曇の地		田園の光
163	山は白雪 田園走る サイクリングの 風みどり		かおり子
164	山葵畑の 木陰を求め 行きかう人の 笑顔かな		かおり子
165	錦の中に 柏手ひびく 何を願うか 旅の人		かおり子
166	星はまたたき 光はさえて 郷土安曇野 栄あれ		かおり子
167	穂高駅から 寄り道すれば 参道導く 乙女巫女		有明里玄山
168	酔ってほど良い 旅路の酒は 安曇節だと 唄がでる		有明里玄山
169	安曇野銘酒の 酔園笹は スマホ娘の ほほ染める		有明里玄山
170	穂高神社の孝養杉は 夫にとどけよ! 守り神		有明里玄山
171	穂高駅から 迎える唄は 巫女と並んだ 常念坊		有明里玄山
172	安曇平に 唄声響く 里山2つの 安曇節	吉澤 玄秀	
173	唄は一つで 踊りは2つ 故郷一つの 安曇節	吉澤 玄秀	
174	スマホ時代の 娘子達は 耳にホゾかい 通学路	吉澤 玄秀	
175	昭和戦時の 信州疎開 江戸の小町は 穂高町		有明里玄山

NO.	作詞作品	応募者名	ペンネーム
176	くつで結んだ 穂高と銀座 今じゃ柳は 駅の庭		有明里玄山
177	スマホ時代に ラインでつなが タヌキ・キツネの ばかしあい		有明里玄山
178	妻をめでたらば みめうるわしく 情け無くして パパとなる		有明里玄山
179	思い出してよ！ 心の歌を 静かに唄え 安曇節		穂高川
180	創れ歌えと 世間はさわぐ 動機見えない 歌がある		穂高川
181	俺のやること みんなバカだよと うるさいババ 鬼ババあ		安曇野大王
182	ボケた年寄り 潮時見えず 娑婆を騒がし あの世ゆき		安曇野大王
183	松川村の 田んぼでとれた おいしいお米 食べにきて	馬場さき	
184	岩原良いとこ 一度はおいで オオルリシジミ 道祖神		せんにん工房
185	おいでなさんし 岩原良いとこ オオルリシジミ 道祖神		せんにん工房
186	有明山に 雪がつもると 雪の白さが きれいです	石田 樹	
187	松川は 田んぼや川が たくさん広がり きれいです	倉科雪希	
188	松川村の 田んぼや夜空 とてもきれいで すてきです。	渡邊茉衣	
189	クララ囲んで オオルリシジミ 踊りたいだけ いつまでも		うたそら
190	歌垣のはら 生息地(いきち)の祭り 風に向かって チョウはゆく		うたそら
191	穂高神社の 祭の境内(なか)で お船ぶつかる 威勢よさ		小林一茶(ひとちゃ)
192	小鳥(とり)が運んだ 桜の種が 花を咲かせた 桜仙峡(おうせんきょう)		小林一茶(ひとちゃ)
193	有明山ろく 神話がめぐる 雨戸舟岩 天狗岩		常念 サンタ
194	有明山から 平をみれば 波が寄せるよ 黄金波		常念 サンタ
195	安曇の山城 前庭狭い 裏はアルプス はてが無い		常念 サンタ
196	雲の切れ目に 顔出し見れば 安曇平は 黄金波		常念 サンタ
197	秋の夕ぐれ 日の入り早い 戸放ヶ岳が 隠しよる		常念 サンタ
198	北の安曇野 酒米どころ 信州ばかりか 灘にまで		常念 サンタ
199	松川米どこ 酒米どころ 地酒ばかりか 灘の酒		常念 サンタ
200	東山から 顔出す月を 有明山が 手でまねく		常念 サンタ
201	お前行くかと 安曇野おどり ボケて踊って だれが見る		花咲山のばば
202	唄を創れば 頭がくるう ほどを知らない 安曇節		花咲山のばば
203	まごと踊れば これまた楽し 五香漂う 安曇節		花咲山のばば
204	すずむしのこえ さやかにひびく りんりんぱーくの しぼのうえ		おおた ゆみこ
205	うたごえひびく あおみのさと ごがつかぜに のりながら		おおた ゆみこ
206	なつのよいなら ふるさとまつり われもわれもと まいおどる		おおた ゆみこ
207	たかせのかわら うちあがるはなび みあげるかおに えみうかぶ		おおた ゆみこ
208	たずねておいで こころのままに おもいでつくる あずみので		おおた ゆみこ
209	やさしきおもい かさねあわせて ともおどろよ あずみぶし		おおた ゆみこ
210	みらいのすがた えがきあえれば ふるさとたのし なかまたち		おおた ゆみこ



NO.	作詞作品	応募者名	ペンネーム
211	さきほこるはな あずみのこうえん うつくしきいろに よいしれる		おおた ゆみこ
212	さくらまいちる ありあけさんしゃ かたりあいましよ さけをてに		おおた ゆみこ
213	あなたもわたしも たのしみましよう あずみぶしから つながって		おおた ゆみこ
214	いくつのとしへて つたわるものか とわにうたおう あずみぶし		おおた ゆみこ
215	おどるてさきの やさしきうごき こめをいとむ ころから		おおた ゆみこ
216	あやなすいしょうで ことほぐさとの いかさかのおもい いつまでも		おおた ゆみこ
217	安曇節だよ！ 創った歌詞は 唄えなければ ただの紙		常念坊
218	つくれつくれと 出てくる歌は それがどうした 安曇節		常念坊
219	創れ創れと 頭の中で それが何だよ ただの歌		常念坊
220	高瀬溪谷 秋風ふいて 紅葉流れて 越後まで		塩からとんぼ
221	東山から 松風無くし 冬の便りか 秋霜譜		塩からとんぼ
222	神と仏が この世にいれば 心豊かな 安曇節		塩からとんぼ
223	十五夜お月さん すすきと団子 彼岸花から 秋の舞(安曇節)		塩からとんぼ
224	流れ行く水 もとにはあらず わびの世界か 安曇節		塩からとんぼ
225	じじとばばとが ケンカをすれば メール飛びこむ まごの顔		穂高のじじ
226	パパにおこられ ジジかわいそう 頭使えと まごあいず！		穂高のじじ
227	有明山より 眼下を見れば 穀倉地帯は 里の秋	佐伯治海	
228	山葵畑で 鰻をつかみ 炭火で焼いて 酒を飲む	佐伯治海	
229	寄れや寄ってこい 穂高の神社 唄って踊る 神楽殿	佐伯治海	
230	屋敷林なら 全国いちよ 歴史訪ねて 安曇節	佐伯治海	
231	冬の絶景 有明山に 映る朝陽が 輝いて	中田光男	
232	有明山の 三つの峰に 麓の神様 鎮座する	中田光男	
233	牧の獵師の 小林喜作 槍への近道 新道ひらく	中田光男	
234	五月(さつき)安曇野 稲田に写る 逆さ常念 美しき	中田光男	
235	いでゆの宿に 月にうかれて 見た常念 酒をつぐ		ちんどん

## 以下は次回選考対象の作品

NO.	作詞作品	応募者名	ペンネーム
1	来たれ拳(こぞ)りて 安曇の里に 名所や景色が 満ちてます		
2	安曇野潤(うるお)す 清き水 人や田畑の 命(いのち)水		
3	安曇自慢は お山と山葵 いずれ劣らぬ 宝物		
4	彼方此方(あちらこちら)に 湧き出す清水 大アルプスの 伏流水		
5	見よや今年も 安曇の里は 農作物も 大豊穡		
6	水のきれいな 安曇の里は 人の心も 美しや		
7	安曇野名物 数々あれど いずれ劣らぬ 宝物		
8	ここは安曇野 良い所ばかり 水も空気も 野も山も		
9	台風多き 里なれど アルプスが盾で 被害なし		
10	水車小屋から 空見上げれば にっこり微笑む 黒澤さん		
11	八面大王 ギシキの岩屋 それを守るは 磨崖仏		
12	鼠穴(ねずみあな)から ちよいと顔出した 神の使いか ねずみたち		
13	西の麓の 有明山は 何処の富士山 何処の富士山 安曇富士		
14	高瀬河原の 柳と共に 稚児稚児愛らし 稚児稚児愛らし 花が咲く		
15	鼠穴から 善光寺へと 繋ぐ伝説 繋ぐ伝説 懐かしや		
16	燕山麓 登りて見れば 安曇平は 安曇平は 美しき		
17	安曇平の 人柄土地も 昔ながらの 昔ながらの 思いやり		
18	光城山 昇竜桜 連なり咲けば 人の波		
19	田淵行男の 愛でたる山よ 常念岳に 蝶が舞う		
20	残しおきたい 安曇の自然 巨匠三人 絶賛す		
21	長峰山から 眺望すれば 北アルプスは 一望に		